

同居住宅に関する研究

第2報 親・子両世帯の意識に影響を与える要因

桜の聖母短大 ○佐藤美枝子 日本女子大家政 沖田富美子

目的 第1報では一地方都市において、親・子世帯で同居生活をしている家族の生活の実状とその評価について分析を試みた。その結果親・子世帯ともに現状の生活に満足し、また現状の生活を維持することを希望しているものが多かった。しかし現状をかえることを希望しているものが、子世帯にみられることから大都市で一般化しつつある、いわゆる二世帯住宅志向への動きがあることを見いだした。本報では地方都市における二つの世帯が一緒に居住する場合、各世帯の意識に影響を与える要因を見いだすことを目的としている。

方法 第1報（1993年度大会時発表）と同じで、福島市及び福島市郊外に親・子世帯が居住している住宅の各世帯の主婦を対象としている。有効回収数は親・子各世帯208件である。

結果 生活行為の場（食事室、台所、団らん室、接待室、浴室、洗面所、便所、玄関）についての現状の形態、満足度、今後の希望、必要性等に対する意識及び評価は、親子世帯で異なるが、①満足度、希望、必要性に対する両世帯の意識は、いずれも同居に対する考え方、現在の同居に対する満足度によって影響を受ける。その他②生活行為の場の満足度は、親世帯は親夫婦の年齢、健康状態、性格に、子世帯は子世帯主婦の職業、性格などにより影響を受ける。③今後の希望については、親世帯では特に主婦年齢、子世帯では主婦の性格、家計の形態なども影響する。④今後の必要性については、前述の要因の他に家計の形態、主婦の性格が両世帯ともにも影響する要因となっている。⑤生活行為の場別に見ると（結果の一部）接客室、洗面所、玄関に対する現状の満足度は親世帯夫婦の年齢、子世帯の食事室や浴室、玄関等の今後の必要性についての意識は同居する相手により異なる。